

メルロポンティにおける「統合的感覚」と实在

——セザンヌの考察を通して——

川里 卓(名古屋大学大学院)

本論文の目的は、セザンヌ(1839-1906)の絵画には「統合的感覚」に由来する特徴が見られ、そのような特徴は、真の实在や全体的生を表現しようとする彼の試みと不可分の関係にあることを検証することにある。

セザンヌの絵画においては、なぜ「統合的感覚」に由来する特徴を見出すことができるのか。彼は、絵画の中に、ある種の皮膚感覚である空気感や嗅覚である香りなど、単なる視覚とは、質的に異なる要素を表現しようとしているからである。セザンヌはどのようにこれを表現し、その表現は何を目的としているのか。本論文ではメルロポンティ(1908-1961)の考察を参考にして、その意義を追求する。

1. セザンヌと「統合的感覚」

本章ではセザンヌの絵画の特徴を三つの観点から検討する。

1.1 色彩という方法

色彩のコントラストは、事物の形を表現し、絵に立体感を持たせることが出来るとセザンヌは言う。自然界においては、色調やそのニュアンスが変化することで、岩や木など自然の事物はおのずから形を現す。なぜセザンヌはこのような手法を用いたのか。それについて、メルロポンティは言う。「彼[セザンヌ]は、形を成しつつある物質と、自発的な組織化によって生まれる秩序を描こうとする。彼は「感覚」と「知性」との間に切れ目を置かず、知覚された諸々の事物の自発的な秩序と、諸観念や諸科学の人間の秩序の間に切れ目を置く」(DC, 1311)。「自発的な秩序」とは、私たちが対象を認識する際に、意識の内部で起こるプロセスのことである。このような知覚の過程そのものに近づくことで、セザンヌは、私たちが対象を認識する過程や、私たちの心が捉える対象の姿を、絵の中でより本質的な姿で提示する。ここには、視覚において、明確な輪郭線によって区切られた延長、つまり量として扱う視点から、様々な色彩のニュアンスが最初に存在し、そこから延長を持つ形が形成されるという、質的な視点への転回が見られる。まず輪郭線を描き、そこに様々な色彩を置く手法は、事物に確固たる輪郭があるという日常的な視点がそのまま絵画に反映されている。反対に、セザンヌは、まず質的な差異を持つ状態の認識があり、それが延長という量的な側面を構成する手法を実現する。例えばリンゴを認知するとき、自分の意識に現れるリンゴの姿を私たちは捉えている。それは量に還元することの出来ない、絶対的な質感である。私たちの意識にとって、量の問題は質の問題として提出されている。セザンヌが絵画で表現しようとしたことは、私たちの認識のこのような質的な側面である。対象を意識にとっての質という観点から見ることで、絵画はより知覚の本質に近づき、深い真理をそこに表現できるようになる。

1.2 色彩と形

セザンヌにとって、一つの色彩は絶対的な色として現れない。ある色は、他の色との関係によって、その価値が決まる。白が一つの質的なニュアンスを持った感覚として現れるように、黒も他のものに還元できないニュアンスを持つ色彩である。しかし、これら二つの色彩は、他の色彩との比較のなかで価値を持つ。セザンヌは言う。「影とは、光のような色彩である。しかし、影はより暗いのである。光と影は、二つの色調の関係でしかない」(CC, 76)。白と黒のコントラストがあるところでは、白と黒の境目を私たちは自然と見分ける。その場合、それぞれの色彩が持つ質的な差異が、輪郭線や事物の形を形成する。まず明確な延長を持つ事物があって、その形の中にそれぞれの事物のニュアンスを私たちは見出す

のではない。反対に、それぞれの色彩が持つ質的なニュアンスが最初にあり、それが事物の延長を形成する。たとえ輪郭線を明確に描くことをしなくても、形と形の間には事物の境界は現れるとセザンヌは言う。「右や左、ここやあちらなど、あちこちから、自然の色調や色彩やニュアンスを私はつかみ、それらを固定化し、近づける。それらは、私が意図することなしに、岩や木になる。それらはボリュームを持ち、価値を持つのだ」(Cézanne, 149)。色彩のコントラストがあるところには、自然と輪郭線を私たちは見出すことが出来る。量を含む延長が対象を構成するのではなく、質的存在である色彩やニュアンスが、延長を持つ形を形づくる。セザンヌが考える対象の形とは、質的な観点から見た形であって、量としての形ではない。両者の「形」は、異なった観点から形成された「形」である。

1.3 色彩と「統合的感覚」

質的な感覚に、別の質的な感覚が加わると、以前の状態と全く異なる質的効果表現することが可能になるとセザンヌは考える。量的なものに別の量を加えても、そこから決まった効果しか受け取ることが出来ない。一方で、ある質的なものに別の質が融合すると、因果関係からは説明できない全く異質な状態が生み出される。例えば、赤や黄色の色彩の中に青色が混ざること、色彩という視覚的性質とは別で、触覚的、ないしは肌感覚的な空気感が表現されるとセザンヌは言う。単に色としての赤と黄と青からは、空気感という色彩とは異質な質感が生まれることはない。しかし、これら色彩を巧みに調和させることで、もとの要素とは全く異なる効果を生み出すことが可能になる。視覚的な芸術である絵画において、異質な要素を組み合わせ調和させることで、空気感という視覚とは別の感覚が表現できる。それは、色彩のコントラストや調和の中から生み出される、色彩とは別の次元からやってくる質感である。ここには、ある質感が別の質感と混ざり合い、その質感とは別の感覚を生み出す、「統合的感覚」という側面を見出すことが出来る。

2. 「統合的感覚」と实在

本章では、「統合的感覚」という特徴を持つセザンヌの絵画が、対象の实在や全体的感覚と深く結びついていることを検証する。意識的知覚あるいは科学的思考が入り込む前の知覚は、「統合的感覚」という特徴を備えた知覚である。それは同時に人間にとっての全体性を含んだ感覚であるとメルロポンティは言う。「根源的な知覚において、触覚と視覚との区別は未知のものである。その後で、身体の科学が、私たちに諸感覚の区別を教える。体験された物は、諸感覚に与えられたものから再発見あるいは構成されるのではなく、それらが輝く中心として一挙に現れるのである」(DC, 1313)。「根源的な知覚」においては、ある一つの知覚に生じた刺激は、同時に私の身体の全体的な感覚を呼び起こす。「私が音を見るとき、その音の振動に対して、私の全感覚的存在、特に色彩が可能になる私自身のこの感覚が反応することを意味している」(PP, 925)。科学的思考が入り込む以前の知覚は、このような全体性に結びついた特徴を備えている。セザンヌが絵画で表現しているものは、このような特徴を持つ、根源的な感覚から見た対象の实在の姿である。これは体験される限りにおいての实在であり、超越的な感覚を含むものではない。セザンヌの絵画は、このような対象の姿を表現しているのである。

主要参考文献

Joachim Gasquet, *Cézanne*, Les éditions Bernheim-Jeune, 1921.
Maurice Merleau-Ponty, *Œuvres*, Gallimard, 2010.
Conversation avec Cézanne, Éditions Macula, 2011.